

## 2025 年度 卒業式・学位授与式 学長式辞

本日ここに、神奈川大学から晴れて「学士」の学位を授与された皆さん、「修士」の学位を授与された皆さん、そして「博士」の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。卒業生、そして修了者の皆さんはもちろんのこと、皆さんを今日まで永きにわたり守り、育て、支えてこられたご家族・ご関係の皆さまのお慶びもひとしおのことと存じます。神奈川大学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。

本学は 2028 年に創立 100 周年という大きな節目を迎えます。神奈川大学は、1928 年に横浜・桜木町の地で米田吉盛先生が創設した「横浜学院」をその原点としています。

創立当初から、地元の造船所やドックで働く若者たちの「もっと学びたい」「成長したい」という思いに応えるため、門戸を開いてきました。

この「学ぶ意志を持つすべての人を応援する」という姿勢は、今も神奈川大学の根幹にあります。

本学では、「教育は人をつくるにあり」という理念のもと、研究者による自由で実践的な教育が行われてきました。皆さんも、ただ答えを探すだけでなく、「問う力」「考え続ける力」を学んできたはずです。

変化の激しい現代社会においては、“正解が用意されていない問題”にこそ向き合う力が求められます。

皆さんが大学で得た知識、経験、人とのつながりは、必ずやその力の源となるでしょう。

さて、皆さんは卒業、そして修了と同時に、神奈川大学の卒業生組織「宮陵会」の一員となります。

「宮陵(きゅうりょう)」という言葉は、一般には「丘陵地帯」の「丘(おか)」の字が用いられることが多いのですが、神奈川大学の OB・OG 組織である宮陵会の「宮」は、「宮殿」の「宮(みや)」を用いています。

その由来は、かつて大学が横浜六角橋の地に移転する以前、地域の鎮守である杉山神社の正面に位置していた地帯が「宮面(みやめん)」と呼ばれていたことに由来することから、「宮(みや)」の字を用いたと言われています。

それは、単なる地名ではなく、本学と地域社会、そして歴史との深いつながりを象徴する言葉です。

これからは、皆さんが「つながり」の中核を担い、後輩たちの道しるべとなる番です。

大学で築いた友情や信頼、そして多様なネットワークは、人生のどこかでまた必ず皆さんを支え、大きな力となってくれるでしょう。

どうかそのつながりを大切にしてください。

こうして皆さんは、本日、神奈川大学の卒業生あるいは修了者として新たな一歩を踏み出します。

その皆さんがこれから歩いていく社会は、今、大きな転換期にあります。

地球環境、AI と人間の関係、国際紛争、人口減少など、解くべき課題は山積しています。

このような状況について、本学の特別招聘教授であり、先年、文化勲章も受章された岩井克人先生は、「世界は 1930 年代のような暗黒の時代を再び迎えるかどうかの瀬戸際にある」と警鐘を鳴らしておられます。民主主義、法の支配、思想や表現の自由、人権の尊重といった“近代”の価値が揺らぎつつある点は、当時と共通する側面があるという指摘です。

岩井先生は、こうした時代において日本が果たすべき役割は、どれほど平凡に見えようとも、民主主義や思想や表現の自由といった普遍的価値を守り続けることにあると述べています。

私たちは、ドローン兵器が飛び交うこともなく、ミサイルが飛んでくることもない平和な社会の中で暮らしています。また、自由に考え、自由に意見を述べることができる環境の中で学び、議論し、研究することができました。しかし、こうした状況は決して自明のものではありません。

思想の自由、法の支配、人権の保障といった近代民主主義の基本原理は、歴史の中で多くの努力と犠牲の上に築かれてきたものです。そしてそれは、守り続けようとする強い意志がなければ、あっという間に失われてしまうものでもあります。

皆さんが学んでこられた大学という場は、まさに「自由」の上に成り立つ場所です。大学の授業は、決められたものを一律に行うものではありません。教員それぞれが思想と学問の自由に基づいて教育を行い、学生はそこで自由に考え、自由に議論し、学問を深めてきました。皆さんは、この自由な学問の環境の中で 4 年間、大学院においては 2 年間あるいは 3 年間の年月を過ごしてきたのです。

しかし、「自由」は自然に発生し存続するものではありません。それを守るためには不断の努力が必要です。その努力とは、声高に自由を叫ぶのではなく、意見を異にする他者と対話を続けることです。

人はしばしば、議論に時間がかかることを煩わしく感じます。対話は時に退屈で、結論に至るまでに多くの時間を要します。そのため、「誰か強い権力を持つ人が決めてくれれば楽だ」と思ってしまうこともあるでしょう。しかし、もしそのような方向に進んでしまえば、私たちが当たり前だと思っている自由は、容易に失われてしまいます。

大切なのは、異なる意見を持つ人と対話を続けることです。自分とは考えの違う人の意見にも耳を傾ける。その中で、自分の考えの誤りに気づくこともあれば、新しい視点が生まれることもあります。議論とは、相手を打ち負かすことなく、より良い理解へと共に近づいていく営みなのです。

ここで、英国の思想家ジョン・スチュアート・ミルの『自由論』に触れておきたいと思います。ミルは、「自由とは何をしてもよいという意味ではない」と述べました。個人の自由は最大限尊重されるべきですが、その自由が他者に危害を及ぼす場合にのみ、法によって制限され得る。これがミルの自由論の根幹なのです。

自由とは、実は厳しい側面も持つものです。例えば、何かを選ぶ自由があるということは、同時に「選ばれない自由」が存在するということでもあります。自分が望んだ結果にならないこともあるでしょう。しかし、それでもなお、私たちは自由を尊重しなければなりません。なぜなら、自分の自由を守るためには、相手の自由も認めなければならないからです。

自分の権利を認めてもらうためには、他者の権利も尊重しなければならない。この当たり前の原理こそが、近代民主主義の基盤です。そしてその基盤は、対話と相互の尊重によって支えられています。

現代の世界では、相手を打ち負かすことが勝利であるかのような風潮も見られます。しかし、本当に大切なのは、対立を乗り越え、より高い次元で理解に至ろうとする姿勢です。論破ではなく対話を通じて、互いにより良い結論を探っていくこと。それこそが、自由な社会を支える本来の姿であると私は考えています。

皆さんは、この神奈川大学という自由な学問の場で学びました。ここで培った知識や経験だけでなく、自由を尊重し、対話を大切にする姿勢を、社会に出てからもぜひ持ち続けてください。そして、次の世代へとその価値を静かに守り伝え

ていってほしいと願っています。

最後になりましたが、神奈川大学で学んだことを誇りに、皆さん一人ひとりがよりよい社会の実現に向けて貢献されることを期待するとともに、健康に心がけ、皆さんの人生が素晴らしいものとなることを心より祈念して、式辞といたします。

2026年3月23日

神奈川大学長  
戸田 龍介